

学習院アーカイブズ ニューズレター

08

Gakushuin Archives Newsletter 2016.7.15 vol.



女子短期大学 タイプライティングの授業 昭和28(1953)年頃

赤れんが校舎(4号館)の英語研究室にて

機種もさまざま、古いものも混ざった10台足らずのタイプを机の上に置いて始まった。学生達のために、木製の椅子は脚が7、8センチほど継ぎ足され、着々と環境が整っていったことに皆感激したという。

Contents

京都学習院旧蔵資料・勅額「学習院」 学習院大学史料館 EF共同研究員 橋本 佐保	2
足踏式堅型自動ピアノ ～目白「清明寮」で寮生達を慰めた～ 学習院名誉教授 清水 喜承	4
「山梨勝之進・安倍能成 戦後学習院の出発」こぼれ話 桑尾光太郎	6
主な活動(2016年2月～6月)	8

京都学習院旧蔵資料・勅額「学習院」



学習院大学史料館 EF共同研究員 橋本 佐保

今年は京都の学習院開講から170年目、東京の学習院開講から140年目にあたる。節目を迎えるにあたって、学習院大学史料館では学習院が所蔵する京都学習院関係資料を一堂に会した展覧会、「幕末京都の学習院」展（2016年4月2日～5月28日）を開催した。本稿では、この展覧会に出陳した勅額「学習院」（孝明天皇下賜、近衛忠熙染筆）について紹介する。

勅額「学習院」は校名の由来となった、学習院の宝とも言える存在である。これまでは学習院の記念式典の際に展示されるなどしてきたが、その来歴や資料自体の調査については大久保利謙の研究（『学習院百年史』、昭和56年）以降、特段成されていなかったように見受けられる。本年より初等科正堂に掲げられている勅額（複製）の修復が始まり、また今回の展覧会で勅額を公開する機会に恵まれた。そこで本稿では改めて勅額の来歴や成立の背景を見直していきたい。

（1）京都の学習院とその旧蔵資料の行方

はじめに京都の学習院について触れておこう。京都の学習院は、弘化4年（1847）、京都御所の東側に設けられた公家の子弟が通う学問所である。公家の素養向上を目指した光格天皇の思し召しによって設立された。漢籍や和書を教材とした講義が定期的に行われており、地下や堂上などの身分に関わらず誰でも自由に聴講する事ができる画期的なものであった。幕末の動乱期、文久年間（1861～63）前後は政治の場に利用されたことがあったが、講義はほぼ規定通りに継続して開講されていた。しかし王政復古を経て、内部の学問の派閥争いや財政上の問題などが発生して経営が立ち行かなくなり、明治3年（1870）に京都府に移管され、その幕を閉じた。

その後、京都学習院が所蔵していた資料は様々な場所に散逸してしまった。現在、まとまった資料群を所蔵しているのは、以下の三か所である。

まず一つ目は宮内庁書陵部である。ここには主に事務文書が残されていて、明治期の写本を含めると20件程を保管している。京都学習院が解体された際に宮内省に引き継がれたものだが、その経緯については未だ詳しい事が分かっていない。

二つ目は京都府立総合資料館である。ここでは教科書として使われていた和書・漢籍を約3000冊所蔵している。同館は、集書院から旧蔵書を引き継いでいる。集書院は明治6年（1873）に京都に創設された日本初の民間経営の公共図書館だが、集書院蔵書の中に京都の学習院の旧蔵書籍が含まれていた。京都の学習院が解体された翌年の同4年、宮内省から京都府へ旧蔵書が移管され、その一部が京都府から集書院へ移管された事が明らかになっている。

三つ目が現在の学習院である。ここでは事務関係文書が19件、和書や漢籍が約1500冊、そして三条実万（1802～59、学習院伝奏）染筆の「学則」と近衛忠熙（1808～98）染筆の勅額「学習院」を所蔵している。

東京の学習院は、明治10年（1877）、東京神田錦町の地に華族の子女を教育するための学校として開学した。開業式に先立ち、9月3日に京都学習院の旧蔵書籍83部がこの学校に下賜された。そして10月17日の開業式の際、明治天皇から以下の勅諭を賜った。「（前略）嘗て仁孝帝京都ニ於て学習院ヲ建テ諸臣ヲシテ就学セシム朕今先志ヲ紹述シ本校ヲ名ケテ学習院ト号ス冀クハ汝等子女ヲシテ黽勉時習セシメ以テ皇祖ノ先烈ヲ恢張セヨ」（『学習院百年史』）これにより学習院という名称が定まった。勅額「学習院」は同月中に京都の清水四番御文庫から運び出され、10月26日に学習院へ届けられた。

（2）勅額とは

さて、そもそも「勅額」とはどのようなものなのか、簡単に説明しておきたい。勅額とはその名の通り、天皇直筆の額字、あるいは勅賜の額字の事を指す。つ

まり、(A) 天皇直筆のものと、(B) 筆の立つ臣下に命じて書かせて天皇から下賜するものと、二つのパターンが存在する。字を額に仕立てる文化は古代中国から渡来したもので、日本では主に神社・仏閣等の社殿、拝殿、鳥居、門などに掲げて神徳の発揚に努める為に用いられている。ちなみに日本最古の勅額は奈良県唐招提寺の新宝蔵に納められている「唐招提寺」の額であると考えられており、これは孝謙天皇（在位 749～58 年）の直筆と伝えられる。

勅額が作られる経緯には主に 2 種類ある。①は天皇の思し召しによって作られる場合、②は社寺等の奏請によって作られ、下賜される場合である。

勅額「学習院」は (B) の近衛忠熙染筆で、①の孝明天皇の思し召しによって作られたと伝えられる。ただし三条実万（学習院伝奏）の日記（「実万公記」）によれば、この額は東坊城聡長（学習院学頭兼奉行）からの申し入れによって調整されたとされる。聡長は天保 13 年（1842）の時点で「学習院」の名称を考えていたので、実際には②の奏請によって作成されたものなのかもしれない。

勅額「学習院」は嘉永 2 年（1849）正月 19 日に完成し、同年 4 月 7 日に講堂内の長押に掛けられた。

(3) 勅額「学習院」と扁額「承明門」

勅額「学習院」は「其形、承明門之形」であるとされる（「実万公記」）。承明門とは京都御所の建礼門と紫宸殿の間にある門で、ここに扁額「承明門」が掛けられている。勅額「学習院」の設計図は残念ながら現存しないが、扁額「承明門」の設計図は現在東京都立中央図書館の木子文庫に残されており、制作された当初の様子を知ることが出来る。木子文庫は、先祖代々内裏の造営を担った大工の家柄・木子

家の資料群である。京都の学習院の建設・修理の図面も残されていることから、京都の学習院の造営も手掛けていた事が判明した。

扁額「承明門」は、享和 2 年（1802）に制作された。図面によれば額は木製で、大きさは縦 3 尺 8 寸 5 分（約 116cm）、横 2 尺 7 寸 3 分（約 82.7cm）であった。題字の部分は胡粉（白い顔料）地に仕立てられた。色は題字部分から外側に向かって、朱（緑）、墨塗（黒）、金泥（ボタン部）、紺青、黄、緑青、白緑（淡い緑）、胡粉、朱、墨塗、胡粉、碧青、紺青、墨塗、紺青、碧青、胡粉、墨塗と、いわゆる縹緗模様が施されている。

勅額「学習院」は、縦 104cm、横 76.5cm とやや小ぶりであるが、扁額「承明門」の図面と比較してみると基本的な構造や配色はほぼ同一である。勅額「学習院」がなぜ扁額「承明門」と同じようにされたのかは不明だが、学習院と御所・天皇とを繋ぐ重要なものであったと考えられる。

本稿では京都の学習院旧蔵資料の行方と、勅額「学習院」の移管経緯、そして扁額「承明門」と同様に制作されたことを指摘した。今回は文献調査の結果のみの報告であるが、初等科所蔵の額の修復によって、新たに多くのことが判明するだろう。様々な視点からの調査の進展を期待したい。

参考文献

- ・三条実万「実万公記」（明治 26 年写）、宮内庁書陵部所蔵
- ・佐野恵作『皇室と寺院』（明治書院、昭和 14 年）
- ・京都府総合資料館『資料館紀要 第 7 号』（京都府立総合資料館、昭和 54 年）、文献課「明治初期の蔵書（一） 学習院・漢学所の蔵書」
- ・学習院百年史編纂委員会『学習院百年史』（学習院、昭和 56 年）
- ・大久保利謙『明治維新と教育』（大久保利謙著作集 4、吉川弘文館、昭和 62 年）



図 1 勅額「学習院」



図 2 内裏承明門額図（都立中央図書館所蔵）



図 3 内裏承明門額図（背面、都立中央図書館所蔵）



図 4 内裏承明門額図（着色指示書、都立中央図書館所蔵）

足踏式豎型自動ピアノ

～目白「清明寮」で寮生達を慰めた～



学習院名誉教授（元学習院中・高等科 音楽科） 清水 喜承

はじめに

この楽器は、かつて目白の「清明寮」で過ごされた方々にとっては、大変懐かしく思われる物ではないかと思います。そしてこの楽器はまた大変珍しい楽器でもあります。豎型（アップライト）ピアノの中に、穿孔された紙ロールを設置してペダルを踏むと、ロールが巻き取られますが、途中で「吸気口」が設置してあり、「穿孔」がそこを通過する時の「吸気」が動力となって打弦するという装置が組み込まれているからです。

この楽器はかつて皇太后（貞明皇后）様に献じられた物と伝えられております。そして、自動演奏用の紙ロールを納めた立派なケースが添えられており、その観音開きの扉を開けてみると、

- ・ベートーヴェン作曲 交響曲第五番
第2、第3楽章 リスト編曲
- ・ベートーヴェン作曲 交響曲第九番
第3、第4楽章 リスト編曲
- ・グリーグ作曲 ピアノ協奏曲 第3楽章
- ・ウェーバー作曲 「舞踏への勧誘」 リスト編曲
- ・「越後獅子」



紙ロール

等々と、欧文でタイプされたラベルの貼られた、しっかりした厚手の箱が整然と並んでいるのが目に入ります。

ピアノの蓋を開けるとそこには金色の花文字で

Nippon Gakki Seizo Kabushiki Kaisha
Yamaha Piano
Hamamatsu Japan

と印されていて、さらに内部を見ると、

- ・製造年 1924年（大正13年）

・製造番号 4039

・アクション番号 4311

などを読みとることができます。



大正13（1924）年 日本楽器製造株式会社製

由来

昭和26（1951）年4月、目白に新しく「皇太子寮」が新築され、小金井の寮はその寮名「清明寮」を新



清明寮（昭和27年頃）

寮に引き継ぎ、新清明寮には、高等科3年に進級される皇太子明仁親王（今上陛下）ほか20名程の方々が入寮されました。

明仁親王御入寮にあたり、皇后（香淳皇后）様から「寮生活の徒然の慰めに…」との思し召しで、御所から運ばれたのがこの楽器です。このことについて、もしや何か御存知かと思い、平成10年に富士川鏡一氏（元東宮職・学習院事務官・桜友会事務長）にお電話をしようかしてみたところ、「あれはかつて皇太后（貞明皇后）様に献じられた物とうかがっていますが、迎賓館の地下に置いてあったのを、私の手配で「清明寮」に運ばせました。」と、間もなく100歳を迎えられるとは思えない元気なお声で言われたのを思い出します。それと、殿下方が寮に持っていかれてお使いになっておられた物は、退寮の時ほとんど残して行かれたのではないかと、とも言っておられました。

昭和 28 (1953) 年 3 月、明仁親王は天皇陛下の御名代として、エリザベス二世の戴冠式ご出席のため退寮されましたが、同年 4 月、高等科 3 年に進級された義宮 (常陸宮) 正仁親王がご入寮。大学を卒業された昭和 33 (1958) 年 4 月退寮されました。この後寮舎は中等科・高等科共用の施設となり、昭和 36 年には南側の増改築、さらに西側には高等科の校舎と理科館が建築されました。増改築された「旧清明寮」は一階が中・高事務室、保健室など、二階が中等科教員室・科長室・学務室・放送室など、三階は教科の研究室になっていました。この建物は昭和 52 (1977) 年、百周年記念事業のため取り壊されたのですが、私はそこでピアノの様な楽器を目にすることはありませんでした。しかししばらくして、戦火を免がれて、かつて「図画工作教室」などとして使われていた旧制学習院時代の「医務室棟」の、物置きのように使われていた一室から、ずいぶん傷んでいるが珍しい造りのアップライト (堅型) ピアノが見つかったのです。「造り」から見ると、これは「自動ピアノ」、しかも「足踏み動力」による、との見当



破損の激しい状態で発見されたピアノ

がつき、となると大変珍しい楽器なので、なんとか復元できないか、その可能性を考えるようになりました。

復元、その後

復元の可能性については、当時楽器の保守管理に来てくれていた「矢野ピアノ」に紹介された「橋本ピアノ」から「なんとかやってみましょう」との返事があり、費用についても、中等科で「そのようなことがあるのなら協力しましょう」と申し出てくださいる方があり、お願いすることにしました。橋本ピアノでは、復元に必要な技術・部品等のためにアメリカとも頻繁に連絡を取りながら準備が進められ、ある意味では「学習院の文化財」とも考えられなくはないこの楽器が復元されたのは、昭和 58 (1983) 年でした。

「復元」が完了し、それが「旧清明寮」のあった所に建てられた「中高本館」の五階に搬入された時、3 年前に搬出されて行った時の、全く大破したような状態の物から、それは全く輝かしいものになっていました。

しかし残念なことには、それが現在も続く「戦い」

の始まりだったとは、当時は全く気がませんでした。御存知のようにピアノという楽器は「木」の部分が大変重要です。「響板」としての働きがまず第一です。そして音を出すための弦は鋼鉄製で、各々に与えられた音高を保つために、「木」に打ち込まれた「ピン」で引張られています。さらにこの楽器の自動演奏のためには「ふいご」が必要なのですが、これには接着剤が使われます。これ等には「乾燥」は大敵です。

この楽器が復元されてから、現在の場所に設置されるまでに 30 年以上経過していますが、この間数度の大修理を行わねばなりません。これらについては、現在の設置場所確保も含めて、桜友会、父母会ははじめ多くの方々の多大な御心遣いにより可能となりました。感謝申し上げます。

現在この楽器の管理を担当している「学習院アーカイブズ」の懸命の保守に拘わらず、どうしても防ぎきれないこの「乾燥」という大敵によって、やがて音を聞くことができなくなる危険性は高く、まずはその音と、その音を奏でる姿をしっかりと記録することを考えております。



現在、中央教育研究棟 12 階に置かれているピアノと筆者

*「清明寮」の建物について、また寮での生活については、学習院大学史料館紀要第 22 号 (2016 年 3 月刊) 小特集の中で詳しく紹介されています。

「山梨勝之進・安倍能成 戦後学習院の出発」こぼれ話

桑尾 光太郎

平成 28 (2016) 年は、第 17 代学習院長山梨勝之進 (1877 ~ 1967) の五十回忌・第 18 代学習院長安倍能成 (1883 ~ 1966) の没後 50 年にあたる。学校法人学習院では安倍院長の命日である 6 月 7 日に記念式典を開催し、合わせて両院長の遺品展ならびに展覧会図録の発行を行うこととなった。展覧会と図録の企画は学習院アーカイブズと学習院大学史料館が担当し、平成 27 (2015) 年秋から両院長に関わる史資料の調査を開始した。

平成 28 (2016) 年に入って、史資料の選定・図録の執筆編集・展示構成の検討と作業を進めていくなか、宣伝のためのチラシとポスターを作成した。そのチラシのデザイン案を目にした時、今回の企画が成功するであろうことを内心確信した。「男の顔は履歴書である」とはよく言ったもので、二人の表情が実に奥深く、格好良いのである。展示にも余計な小細工は加えず、素直に史資料や写真そのものがもつ魅力を感じてもらおう構成にしようと思い決めた。



安倍能成について、学習院は昭和 61 (1986) 年に没後 20 年の式典ならびに遺品展を開催したことがあり、学内に残されている関係資料の所在をある程度把握できていた。愛媛県生涯学習センターが所蔵している安倍能成資料の調査を学習院アーカイブズが進めていたこともあって、使用する資料や写真の候補は頭に浮かべることができた。しかし山梨勝之進については、院長在任期が昭和 14 (1939) 年から 21 (1946) 年という戦中戦後の混乱期であり、どこにどのような資料や写真等が残さ

れているのか、一から調べ直さなければならなかった。海軍時代の山梨については『山梨勝之進遺芳録』や、工藤美智尋氏による評伝『海軍良識派の支柱 山梨勝之進』に詳しいが、両書とも学習院長時代の事蹟については空白部分が多く、その空白を埋めるには今回を機に、学習院でのさらなる調査研究が必要であることを痛感した。

山梨は昭和 21 (1946) 年の元旦詔書 (天皇人間宣言) 起草に加わったことが知られており、その草稿が学習院アーカイブズに収められている。そして学習院存続をめぐる山梨と CIE (GHQ 民間情報教育局) との交渉文書も学習院アーカイブズに残されており、まずそれらを戦後学習院の出発点を示す文書として紹介することにした。くわえて学内に残されていた写真や学生寮の日誌、ご令孫の山梨乾一氏よりお借りした資料などを見ていくと、山梨がいかに教養豊かで、かつ学生といることが好きな院長であったかがわかる気がした。学生生徒への愛情や教育への情熱が、学習院存続にむけての根源的な原動力だったのであろう。

筆者は平成 16 (2004) 年、全く仕事とは関係なく岩手県を旅行し、偶々宿泊した湯川温泉の萬鷹旅館で、床の間に飾られた古びた掛軸を目にした。「海軍大将 山梨勝之進」との署名があり、どこかで見た名前だと酒に酔った目で眺めていたのだが、しばらくして山梨が学習院長であり、昭和 20 (1945) 年に高等科学生が勤労働員でこの旅館を宿舎としていて、訪ねてきた山梨が揮毫した書であることに気がついた。約 12 年振りにこのことを思い出して、旅館に連絡をとると掛軸は以前の状態で残されており、早速展示資料の目玉として借用することにした。

ところが掛軸を持ち帰ってみると、元々が昭和 20 年に和紙ではない紙に書かれたうえに、長年の酸性劣化で傷みが激しかった。そこで萬鷹旅館の了解を得た上で、専門の業者に依頼して書の本紙部分を掛



軸から外し、脱酸処理ならびに補修を施して額装した。書は、「安泰を永(とこしえ)として和樂を常とす」と読むのであろうか。山梨は萬鷹旅館に到着する直前の8月9日、花巻で米軍機の艦砲射撃に遭遇し、危うく命を落としそうになっている。どのような心境でこの書を揮毫したのか計り知れないが、すでに戦争の終結を悟っていたのかもしれない。

安倍能成については、

展示や図録で使用しなかった写真を紹介しておく。本年2月、近藤不二元学習院女子大学学長(1930～1998)の遺品から発見された写真で、近藤は学習院大学第一期生であり学習院新聞社ならびに大学写真部の創設メンバーでもあった。昭和28(1953)年11月、院長舎宅縁側での、当時文学部哲学科副手だった近藤による撮影と思われる。飾らない安倍夫妻のリラックスした表情が魅力的で、こうした写真を段ボール箱の中から発見する瞬間が、資料整理に携わる仕事のなかでの至福の時である。今回の展示では残念ながらスペースの都合で使用できなかったのだが、今後安倍に関わる展示や図録編集などの企画があるとすれば、必ず使用される機会があるだろう。

今回の展示には、2週間という短い期間にもかかわらず1357人もの見学者にご来場いただいた。山梨院長、安倍院長に直接薫陶を受けた世代の卒業生が、懐かしそうに資料や写真に見入る姿を目にすると、企画と準備をしてきた者として嬉しい限りである。学習院アーカイブズが発足して間もない平成24(2012)年2月、講演会で招いた菊池光興氏(元国立公文書館館長)より、『いのち』と付き合い『にん

げん』に寄り添う優しいアーカイブズとなることを心から期待している」(本誌第1号)、との言葉をいただいた。以来、「人に優しいアーカイブズ」であることを目標としてきたが、今回そのことを少しは実践できたような思いがする。

山梨勝之進や安倍能成の名を耳にしたことがなかったであろう現役の学生生徒も、筆者の予想を超えて大勢足を運んでくれた。学生の多くは、学習院が敗戦直後に存亡の危機にあったこと、そして山梨・安倍はじめ関係者の必死の努力によって、私立学校としてのスタートを切ったことを初めて知ったと思われる。彼らが、茶色く変色した一見地味な文書が現在の学習院の原点を示す貴重な歴史資料であること、本物の史資料を目にすることによって学習院の歴史への想像力が膨らんでいくを感じ取ってくれば、学習院の伝統といったものは、知らず知らずのうちに受け継がれていくに違いない。(学習院アーカイブズ職員)

《追記》紹介した山梨勝之進書「永安泰常和樂」は、萬鷹旅館の高橋勝宏様・安子様ご厚意により、学習院アーカイブズに寄贈されることとなりました。学習院の歴史を示す貴重な財産として、保管・活用していく所存です。



主な活動 (2016年2月～6月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新 (平成27年度作成文書ファイルの追加、平成15年度以降作成文書ファイルの遡及入力)の継続
- ②西5号館地下倉庫の文書ファイル等の評価選別案作成 (平成14年度以前の文書ファイルを対象)

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①宮内庁公文書館所蔵学習院関係文書の調査・デジタル化 (継続)
- ②女子部史料室所蔵資料の選別・整理及び目録作成・デジタル化 (継続)
- ③人事部所蔵文書の受入れ (3月)

◆史資料のデジタル化・修復

- ①自動演奏ピアノの修理・調律 (2・4月)
- ②学習院大学卒業アルバム (昭和39年～43年)のデジタル化
- ③山梨勝之進元院長書の修復 (～4月)
- ④初等科勅額の修理 (5月～)



初等科勅額作業

◆史資料の受贈・購入

- ①近藤不二 (元女子短期大学長、女子大学初代学長) 所蔵資料 写真アルバム等 (2月)
- ②木下是雄 (元理学部教授、元大学長) 辞令等 (2月)
- ③小山観翁氏旧蔵国劇部資料 (5月)



国劇部資料

- ④『航跡』ほか 1970年代の職員同人誌 (5月)
- ⑤華族女学校卒業生 写真画像 (6月)
- ⑥安倍能成書簡・はがき、自筆原稿 (6月)

◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①女子部「高Ⅲ自由講座 学習院アーカイブズ見学」での施設見学・史資料紹介 (2月)
- ②辞令交付式講演「学習院の歴史－史資料からみる学習院の教育・キャンパス・学生－」講師 (4月1日)
- ③日本テレビ「皇室日記」初等科机椅子等撮影 (4月6日・18日)
- ④経済学部入門演習にて「学習院の歴史」講義・施設案内 (5月19日)
- ⑤大学文学部教育学科専門科目「学校アーカイブズ論」での所蔵資料紹介 (6月13日)
- ⑥大学ラーニング・サポートスタッフ研修講師 (6月15日)
- ⑦大学史料館「幕末の京都学習院展」への勅額複製ほか史資料貸出 (4月～5月)
- ⑧展覧会「山梨勝之進・安倍能成 戦後学習院の出發」(6月6日～18日、大学史料館展示室)



展覧会風景

◆その他

- ①全国大学史資料協議会東日本部会への参加、明治大学 (3月)・東京農業大学 (5月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第8号
2016 (平成28) 年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>